日本山岳會富山支部會報
昭和２３年　　棟方志功

No.102

2016 年 6 月 21 日

公益社団法人日本山岳会富山支部

第 31 回播隆祭・記念登山を開催　・　高頭山（たかずこやま）1210m

平成 28 年 6 月 5 日（日）に富山市旧河内村の播隆上人生誕の地に立つ顕頌碑前において、第 31 回播隆祭が開催されました。この地は、日本山岳会富山支部が継続して登山道整備を行ってきた「高頭山」の登山口でもあります。一昨年出版された『富山の百山』にも選ばれている「高頭山」は登山者が増えているようで、今日も山岳会や個人の登山者の姿がありました。

この地は、県営林道「町中水須線」の新設工事が進んできており、今年は顕頌碑前の熊野川を渡る橋梁工事が始まっています。それに伴って付近の杉が伐採されて明るくなったと感じました。しかし、この影響で強風がまともに顕頌碑付近に吹くようになったのか、富山支部創立 50 周年記念として植樹したオオヤマザクラが大きく倒れそうになるという事態になりました。そのうちの一本は顕頌碑に向かって倒れたため、やむなく撤去せざるを得なくなりました。

播隆祭は、日本山岳会富山支部のメンバーや一般登山者、生家の会の皆様方総勢 36 名で滞りなく終了し、「高頭山」記念登山へ出発するグループと、傾いた記念樹の復旧作業をするグループに分かれて心地良い汗をかきました。印象的だったのは、播隆祭のセレモニー中において、献花に一頭のクロアゲハが花の蜜を吸うためか、花から花へと優雅に舞い、セレモニーが終わるとともに、森の中に消えていきました。播隆上人は 18 歳でふるさとを後にして、再び、この地を踏むことはなかったということですが、どこかで見守ってくれているのかも知れません。　　（河合義則　記）

目　　次

第31回播隆祭・記念登山を開催・・・・・・・・・・・・河合義則 1
記念登山・高頭山(たかずこやま)・・・・・・・・・・・・・・渋谷茂 2
富山市山岳協主催親睦登山・小佐波御前山・山岸和子 2
2月例会山行・大寺山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 渋谷茂 3
五支部合同スキー山行・大寺山
・・・・・・・・・・・近藤晋・永山義春・本郷潤一 4
アルパインスキークラブ「春の全国集会」に参加して
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・山田信明 5
3月例会山行・扇山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・近藤晋 6
第32回全国支部懇談会（新潟県岩室温泉・弥彦山）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松本睦男 6
京都・滋賀支部創立三十周年記念式典・交流登山・比叡山延暦寺・・・・川田邦夫・鍛治哲郎・渋谷茂 8
アルパインスキークラブ立山合宿・・・・・・・近藤晋 10
5月例会山行・城ヶ平山・・・・・・・・・・・・・・本郷潤一 11

追悼

袴腰山を愛した西川雄策氏・・・・・・・・・佐伯郁夫 12
西川雄策氏を偲ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・中薮淳一 13
河村靖晴君追想・・・・・・・・・・・・・・・・・・長崎喜一 14
河村さんの思い出(夢源工房の事など)・・・藤條好夫 15
平成28年度富山支部総会の報告・・・・有澤辰彦 16
会員異動　　編集後記・・・・・・・・・・・・・・渋谷茂 16

記念登山・高頭山（たかずこやま）

期日：平成 28 年 6 月 5 日(日)

メンバー：山田、近藤、松本、永山、本郷、宮崎、渋谷（ほか会員外、3 名同行）

天気は回復基調。朝方から曇り空の天気。播隆祭を終えて、午前 9 時 50 分に、小原川と熊野川の分岐点にある登山口を出発する。最近は人気があって、週末となれば登山者は多い。今日は、城端山岳会の皆さん 19 名も登山される。

登山口付近には、クルマバソウ、ウツボグサ、ヤマヨメナなどが咲いている。登山口からすぐに送電線がある。新熊野川発電所の発電音を聞きながら、スギの林の中の階段状の急登を登る。杉林を抜け切ると、先週、登山道整備の時に美しい姿を見せてくれたヤマツツジが健在であった。導水管に沿って行くと、右上の斜面にニホンカモシカが、愛嬌のある翁顔で出迎えてくれる。視線があっても逃げようとしない。好奇心いっぱいの動物である。導水管をいったん離れて、山中に入ると、約 20 頭余りのアサギマダラが優雅に飛んでいる。日本の南からの渡り途中だとのこと。ヨツバヒヨドリやヒヨドリバナがこの辺りに沢山生えている。アサギマダラは、この植物がお気に入りらしい。再び導水管のある場所から、水平道を進むと三枚滝分岐に着く。会の苦心の作品のベンチがある。一服だ。

ここからが本格的な登山開始である。ブナやナツツバキなどを観察しながら登って行く。ユキツバキも多い。登山道整備の時は、清楚な白花を見せてくれたハクウンボクの花は、散ってしまった。立山スギ伐採跡のあるシャクナゲ平に到着。

休憩ののち、白い花のタンナサワフタギ、アカミノイヌツゲ、ナナカマドなどの林の中を潜り抜けると、ブナ林に出る。幾分涼しく感じるのはブナの効用かな。ゴヨウマツやネズコの大木もある。高頭山は双耳峰なので西峰の小ピークを登り、一旦少し下って、再び頂上に向けて緩やかな登山道を登って行く。霧がブナ林を覆い、幻想的な雰囲気が演出される。緑葉の心地よさ、雪の「白」と樹木の「緑」は、癒しの山の色である。ネマガリタケのなかの二等三角点を過ぎると、すぐ頂上である。ブナが林立し、周囲の展望は得られない。広い頂上台地で憩う。

枯葉のなかからギンリョウソウが顔を出している。ブナの林のあいだを霧がぬうように漂う。自然の風貌を味わいながら下る。アサギマダラもニホンカモシカも帰りを待っていてくれたようである。

追記：高頭山の登山道整備は 5 月 28 日（土）に行った。参加者は山田、川田、有沢、本郷、河合、山岸、藤條、島津、渋谷（ほかアサギマダラの観察に会員外で 2 名同行）（渋谷茂　記）

富山市山岳協会主催親睦登山　・　小佐波御前山 754.2m

期日：平成 28 年 2 月 11 日(木・祝日)　晴

メンバー：木戸、山田、永山、渋谷、本郷、山岸、菅田、森田、櫻井

毎年恒例の雪山ハイクは、今年は富山市の小佐波御前山。登山口はかっては猿倉スキー場として賑わっていたが、現在は森林公園広場となっている。小佐波御前山は通年気軽に楽しめる山である。

加盟団体参加者 45 名が、猿倉山スキー場の駐車場に 8 時 30 分集合した。笹津周辺は風の通り道、この日も寒風が吹き荒れて手先の感覚が無くなる程で、すぐに登山を開始する。JAC 富山支部は木戸さんが先頭。多数の参加者で、道は踏み固められカンジキ無しで登れる。左手に富山市、右手に舟倉用水、遠くに立山連峰が見え隠れする。御前山より杉林をぬけて尾根道へ。やがて山頂の二等三角点に 11 時 30 分に着く。昼食は避難小屋を通り過ぎたパノラマ展望台で、11 月採取したなめこのみそ汁と、皆さん持ち寄りのおかずやフルーツで、賑やかに美味しく頂く。全員で集合写真を撮り、下山は往路を戻る。駐車場に着いた時は強風が治まり、子供達の雪遊び広場となっていた。　　（山岸和子　記）

2 月例会山行（五支部合同スキー山行偵察）・大寺山　918.9m

期日：平成 28 年 2 月 19 日（金）

メンバー：山田、近藤、永山、本郷、若尾、島津、渋谷

今年の冬は暖冬。降雪の具合が気になってしょうがない。五支部合同スキー山行の会場は、鉢巻山、タカンボー山などを検討するが、大寺山に決定した。「山だけ雪降れ、雪降れ」と勝手なことを願って？過ごす。

朝方は雨。集合場所の庄川水記念公園に着くころには、青空が広がってきた。国道 156 号線を走り、廃業となった旧オムサンタの森スキー場に向かう。道路事情は問題なく、駐車場も除雪されている。積雪量は心配したことはない。ほぼ満足できる量。来週の合同スキー山行までは持ちそうである。

広いゲレンデ跡を登って行く。最近降った雪で締まりがなく、沈みこむ。カンジキで出かけてきたが、スノーシューの方がよかったと思った。本郷さんと交代で、スキーメンバーの歩いたルートを辿る。潜るので結構しんどい。陽光が降り注ぎ温かい。振り返ると、牛岳や鉢巻山、高峰などの山々が遠望できる。北原荘、庄川が眼下に見えている。旧リフト降り場跡に着いた。一服だ。

ここからは、斜面を登ってしばらく林道を歩き、二本の杉が目立つところから斜面を登って行くと、ブナの木が現れ始める。純白の雪の中の登行で、とても気持ちがいい。左の急な痩せ尾根に取り付く。トチノキやホウノキ、ヤマモミジなどの樹木が立ち並び、散居村の景色が望めるようにな

る。稜線は冷たい風が通り過ぎる。小ピークに達すると山々の景観が広がる。残念ながら北アルプスの姿は雲に隠れている。右に尾根を辿って行く。アカマツが生え、二重山稜のような窪地には、スギの木とブナの木が混生している。一旦小谷に下って、稜線をつたって大寺山に到着。

スギの木に「大寺山 919m」の看板がかけられている。前方には、扇山へと続く稜線が延びている。八乙女山から大寺山、赤祖父山、高清水山、高落場山へと続く峰々は、若い頃、積雪期によく登った。大寺山で雪洞を掘り一夜のお宿を「建設」！。友と二人で酒二升を飲み干し、声のあらん限り世良公則の「あんたのバラード」を歌った。当時の写真を見ると、雪の量も多かったのだろうが、スギの木はほとんど見られない。今はかなり背丈がある。なにせ約 40 年も前のことだから。

弁当を食べて、思い出に浸り下山する。スキーの仲間に迷惑をかけてはと、一気に雪面を駆け下りる。自由きままに斜面を下るのは楽しい。これが雪山の魅力である。標高を下げてくると雪はかなり重い。約 40 分余りで駐車場に着いた。

登りは約 2 時間の行程。雪と戯れ、青春を回顧した偵察山行であった。「五支部スキー山行」の打合せを北原荘の女将と行い、湯につかり帰宅する。　（渋谷　茂 記）

五支部合同スキー山行　・　大寺山 918.9m

期日：平成 28 年 2 月 27 日（土）～28（日）

メンバー：山田、近藤、村上、永山、本郷、若尾、島津、菅田、米谷、金尾、山岸、鍛冶、渋谷

五支部合同スキー山行は当初関西支部と京都支部でやっていたが、その後福井支部が入り 2010 年に富山、岐阜支部が参加した。2010 年の開催地は福井で野伏ケ岳、2011 年は富山で大品山、2012 年は岐阜で猪臥山、2013 年は京都で妙高の前山、2014 年は関西で飯綱山、2015 年は福井で護摩堂山（ここは雨で中止となった）。関西支部は会員の老齢化で参加者がいなく脱退したいとの申し出があり、代わりに石川支部に声をかけ現在の五支部となっている。また従来はスキーだけだったが 2015 年からカンジキ班も設定された。今年は全国的に積雪が少なく例年の半分とも言われ心配していたが、事前の下見山行で意外に積雪がありホッとして準備を進めてきた。

2 月 27 日：午後 1 時半北原荘へ集合し準備にかかる。北原荘のロビーは砺波地方の豪農の家の構造材を移築したもので、実に見事な太い欅材でがっしり組み上げられた素晴らしい建物だった。温泉もまろやかな泉質でとても温まった。3 時からチェックイン、ぼつぼつ各支部から到着され 5 時からの講話の頃には出席者 31 名全員揃った。

講話は五箇山の主のような山﨑富美雄氏で、「山スキーと人生」と題し五箇山周辺の山をスキーで走り回ったこと、道宗道の再興や笈ケ岳への熱い思い入れを語られ、最後に氏の要望もあり皆で「シーハイルの歌」を歌って懇親会に移った。

懇親会は例のごとく賑やかに酒宴が始まった。料理はメインの「ぶりしゃぶ」はじめなかなかのご馳走で食べきれぬほど、また各支部からの差し入れの銘酒に次第に酔いは深まっていった。来年の担当岐阜支部から抱負を述べていただき中締めとし二次会に移った。（近藤晋　記）

2月28日：スキー班

旧オムサンタの森スキー場を8時40分に出発し、ゲレンデ跡を全員で登って行く。約50分程で旧リフト降り場跡に着く。久しぶりに良い天気で皆汗をかいて衣服の調整に大変な様子。杉林を抜けて林道跡を進んで行くと左手に良いバーンが現れる。右手の尾根につながっている杉林の中を稜線目指して登って行く。約50分足らずで尾根に出る。頂上かと思ったらもう少し奥の方とのことで、200m程進むと標識がある大寺山頂上に着き、全員で昼食とする。写真を撮る人、雑談する人、色々と会話が弾む。12時頃スキー班、カンジキ班と順次下山する。スキー班は林を避けて登る時に見てきた左手のバーンに入る。雪崩そうなので躊躇していると、近藤さんが追い越して滑って行く。皆、バーンを滑り、林道跡を滑り杉林を抜けて旧リフト降り場跡に着いて小休止。思い思いにゲレンデ跡を滑って駐車場に向う。13時30分に全員下山。楽しい山スキーご苦労様でした。雪の少ない今年の山にしては楽しめました。　（永山義春　記）

カンジキ班

福井支部3名、富山支部6名、スキー班のしっかり付けられたトレースに沿って、昨晩の美酒も快汗となって流れ落ちるなか、ゲレンデ跡を快調に登る。旧リフト降り場跡で小休止。スキー班の内、女性1名がカンジキ班に加わり、山頂に11時15分到着。12時下山開始。登りと違い、新雪を踏みしめ1時間半足らずで登山口に。山田支部長のあいさつで解散となった。　（本郷潤一　記）

（コースタイム）宿８：00→登山口8：40→大寺山11：15（下山開始12：00）→登山口13：30

アルパインスキークラブ「春の全国集会」に参加して

期日：平成28年3月5日(土)～6日(日)

参加者：近藤、村上、山田

日本山岳会アルパインスキークラブ(ASC)に近藤さんの推薦で入会を申し込んだ若尾、村上、山田と近藤の4名で参加登録をしていたが、若尾氏は都合で急遽欠席となり、あとの3名は2泊3日のうち土日だけ参加。寡雪の斑尾高原スキー場(長野県飯山市)で開催され41名の参加であった。

5日朝近藤宅に寄り、立山インターで待つ村上氏を乗せ一路斑尾高原ホテルへ。ラウンジで昼食後3人でゲレンデスキーを楽しんだ。夕食前にあった荒木貞光氏（スキーリゾートコンサルタント）のスキー場開発についての講演は極めて興味深い内容だった。懇親会では新会員として紹介をうける。武井画伯(山梨在住)の絵がジャンケンで近藤さんに当たるハプニングもあった。

翌日はホテル玄関前での記念撮影のあと、山スキー班が先に出発、我々ゲレンデ班もホテル前からスキーをはいてゲレンデへ。何本か滑走し、一番上まで登って妙高をバックに写真をとったりした（青森から参加の竹越氏らと)。松澤氏推薦のクリスタルコース麓のレストハウスに入ると首都圏からの会員が沢山ビールを楽しんでおられた。

われわれは解散式に参加せず先に飯山市街に下り、そば処六兵衛で富倉ソバをいただいて帰途についた。　（山田信明　記）

3 月例会山行・扇山 1033m

期日:平成 28 年 3 月 26 日（土）
メンバー: 本郷、渋谷, 菅田、近藤

当初鉢巻山を予定していたが、井口に福寿草が咲いているのでそれを見にゆくことにして、目的地を扇山に変更した。登山口に車が 4 台止まっていた。みな福寿草を見に来ているのだろう。

9 時 40 分に歩き出し福寿草の咲いている所へ着いたら、先日は 7～8 株だったのに今日は随分沢山花をつけていた。みなカメラを取り出し可憐な姿を写す。その後、杉林の中の道をノイバラやクロモジ、ヤマブキなどの雑木を掻き分けながら登る。林の向こうでギャーギャーとカケスが騒がしい鳴き声を上げていた。ナチュラリストの大先輩渋谷さんがいるので、色々教えてもらいながら楽しく高度を稼ぐ。

福寿草

扇山頂上→

昨晩の寒波で新雪が少々道を覆っている。先行者の足跡が見当たらない。登山者はみな北尾根の一般登山道を登っているようだ。杉落ち葉の陰にミスミソウが小さな小さな赤い蕾をつけていた。2 時間弱で道宗道の分岐についた。今日も良い天気で、立山連峰から日本海まで視界に入ってくる。新雪で真っ白に化粧したブナ林を歩くのは実に楽しい。扇山頂上に新しい標柱が立っていた。5 日前にはなかったから、多分昨日あたり設置したのだろう。みんなで腰を下ろしランチタイム。

下山は北尾根から降りる。タムシバやマンサクの新芽にキンキマメザクラの小さな花が枝いっぱいに咲いていた。まさに山笑う季節を実感する。そして先日気がつかなかったが、いつもの場所に「コシノコバイモ」が 2 輪花をつけていた。丸山の道路沿いにはキクザキイチゲやミスミソウも花をつけていた。いろいろ収穫の多い山行になった。帰りの「ゆ～ゆうランド花椿」の湯も結構でした。

（近藤晋　記）

第 32 回全国支部懇談会（新潟県岩室温泉・弥彦山）

期日：平成 28 年 4 月 9 日（土）～10 日（日）
参加者：木戸、山田、石浦、近藤、本郷、有沢、北田、松本

“鮮やかな早春の越後の山へ“のスローガンのもと越後支部の主催で全国から 253 名の参加があり、岩室温泉で盛大に開催された。

富山支部からは 8 名で、私は隣県の開催でもあり、越後支部の遠藤支部長はじめみなさんに山岳連盟役員時にお世話になったこともあり参加した。

1 日目は開会セレモニーから始まり、元新潟大学教授、石澤進氏の「弥彦連山の植物」と平田大六

氏の「山・人・酒」と題した講演があった。

「弥彦連山の植物」では「海浜」「暖温帯」「日本海要素」「冷温帯」「太平洋要素」「分布の限界」と植物群を区分した植物の紹介があり、弥彦山と佐渡島の植物の比較や気候の変化に伴う種の分布の変動を見るため、ツバキ類に注目して見たと言う興味ある話を時間が超過するほど。ユキツバキとヤブツバキの違い、見分け方の話があり、花糸（おしべの筒）が黄色がユキ、黄から白になっているものはヤブで、早速翌日ツバキの花を観察して確かめた。

おかげで平田大六氏の講演は 30 分に短縮、新潟の酒蔵の話、日本一の酒どころとなったのは、水が軟水であること、酒米に適した米があり、一日の気温の変動が小さいことから米のデンプンをブドウ糖に変えやすいこと、たんぱく質の分解による酒の風味がでることから、この気候風土が酒づくりに適していたからであると力説された。また、酒飲みのマナーがある。「酔わぬは礼を欠く。その酔い様に品格の上下あり。酔って悪しき態は、怒、長、淫なり。」「酒席での約束事は酔醒（さ）めるとともに消えると心得ておくことこそ肝要なり」と身に覚えある戒めに酒宴はほどほどに、百楽の長にしたいものであると思った次第。

講演の後、来年の全国支部懇談会開催県の茨城支部から紹介があった。来年は 10 月 13 日～14 日で、懇談会は筑波山温泉、親睦登山は筑波山で開催するとの説明があった。

夜は交流会となり、新潟の酒と全国の支部からの酒がふるまわれ、アトラクションを楽しみ交流を深め 8 時 30 分過ぎにお開きとなった。

深夜思わぬ出来事が起こっていた。風呂場で倒れている人がおり、部屋の人数の確認に回ってくる。さらに、館内放送での確認のお知らせがあり、全員起きだした。朝になり、京都・滋賀支部の会員が逝去したとの知らせがあり、親睦登山は中止となった。

私たちは弥彦スカイラインを利用して登山することにする。9 時まで通行出来ないので、弥彦神社を参拝することに。弥彦神社は「天照大神」のひ孫にあたる「天香山命」が祭神という。満開の桜を眺め、杉木立の石畳の参道をツバキを観察しながら本殿まで歩く。二礼、四拍手、一礼で参拝する。出雲大社でも四拍手であった。これは神様には八拍手をもって讃える作法が正しいのだそうで、日常的には半分の四拍手の作法にしているとか。

参拝後、スカイラインへ、登り切った所で多宝山（634m）への登り口があり、そこから整備された登山道を 10 分ほど登るとレーダードームの気象観測所がある頂上に着く。明治 27 年に選点された一等三角点がある。眼下に日本海を望めるが黄砂の影響かかすんで見えない。全国の一等三角点のうち 48 か所で設置されたという天測点もあった。天文測量の観測装置が重かったのでコンクリート製の台座となったようである。

順路としては、多宝山―大平山園地―弥彦山が良かったのだが、車が先に行ってしまい、多宝山―弥彦山―大平山園地と巡ることになる。

弥彦山（634m）頂上へはロープウェイ山頂駅から階段状の登山道を登ること約

15 分、「天香山命」が鎮座する弥彦神社奥の院御神廟があり、参拝。弥彦山への登山道は６コースあるが私たちは一番楽なコースを短時間で歩いてきたことになる。弥彦山・国上山エリアは中部北陸自然歩道トレッキングルートになっていて訪れる人も多い。弥彦山一帯はテレビアンテナが林立し、眺望を妨げている。

最後に『日本山嶽志』を編纂した高頭仁兵衛（式）の寿像が設置してある、大平山園地に登る。広い園地の一角に立派な台座に納められている。

帰りに良寛ゆかりの五合庵を訪ねることにする。人間カーナビで回り道をしながら、稲架木のトネリコの立ち並ぶ田園地帯を走ったりしてなんとか到着。五合庵は良寛が修行を終えて越後に戻って約 20 年過ごした庵で、周辺の真言宗国上寺などを散策し帰途に着く。

天気もよく登山を楽しんだとのお礼状を出したら、越後支部では警察の対応など大変であったようで、支部長から 4 月 18 日にやっと落ち着いたとの返事があった。　　（松本睦男　記）

京都・滋賀支部創立三十周年記念式典・交流登山に参加　・　比叡山延暦寺

期日：平成 28 年 4 月 23 日（土）～24 日（日）
参加者：山田、川田、渋谷、飯田、鍛冶、北田

4 月 23 日(土)、標題の記念式典と記念講演 2 題(富山支部の飯田肇会員が「雪渓から氷河へ―立山剱岳の現存氷河―」、千日回峰大行満大阿闍梨の上原行照師が「千日回峰行について」)、そしてクロマチックハーモニカ演奏会があった後、祝賀会が開かれた。翌 4 月 24 日(日)は根本中堂総本堂での朝のお勤めと朝食の後、交流登山などが五つのコースに分かれて行われた。(川田邦夫　記)

「延暦寺で座禅体験」

全く不信心な私だが、寺と神社は好きである。重厚な建物や穏やかな表情の仏像もいいが、大木の社寺林には心が洗われる。だから、どんなに建物が立派でも、境内の森が貧弱だと有難味が薄れる。その点、京滋支部 30 周年で初めて訪れた延暦寺は、期待以上のものがあった。

直前に東京で急用ができたので、当日は、黒部、東京、京都と新幹線を乗り継ぎ、湖西線の比叡山坂本駅から延暦寺まで歩いてみた。門前をなす街並みには派手な看板など皆無で、木々の手入れも行き届いている。土産物店や喫茶店は控えめなデザインだから良く見ないと住宅と見分けがつかない。さすが、歴史のある観光地である。街並みが終わると本格的な上り坂になり、深い森の中に、

右には日吉神社、左には比叡山学園の中学・高校がある。このような環境で、歴史と文化を感じながら学ぶことができる子供達をうらやましく思いながら登っていくと、いよいよ山道となる。ところが、先ほどまでの気持ち良さはどこへやら、参道は暗い杉の植林地の中を行き、路面には枯れ枝や雨水の浸食があって荒れた感じがする。出会ったのは、下ってきた一組のカップルと 20 人くらいの学生のグループだけ。宿に着いてから、つまらない道だと散々吹聴したあげくに、私が歩いたのは裏道だったことが判明して恥ずかしい思いをしたが、翌日、正規の道を歩いた方々から素晴らしい道だったと聞き、比叡山の名誉と比叡山に対する私の思いに傷がつかなかったことにほっとした。

そんなわけで、第一日目は集合時刻に間に合わず、講演とハーモニカ演奏を聴くことができなかったのは残念だったが、錚々たる方々が出席された晩餐会では、全国からの美酒と精進料理を堪能した。宿泊した延暦寺会館は、宿坊というから楽しみにしていたが、国際観光ホテルの看板を掲げた鉄筋コンクリートの宿だった。半分がっかりしたが、施設は快適でスタッフの応接もよく、ご飯（白飯）がおいしくてリーズナブルな宿だった。記念の帆布バックもおしゃれな実用品で、京滋支部のセンスに脱帽。

翌日の朝飯前、延暦寺の総本堂である根本中堂（国宝）で朝のお勤めに参加した、というか、お勤めの様子を見せてもらった。冷え冷えとした本堂に響く読経はオペラ歌手並みの美声で、教会のグレゴリオ聖歌にも通じるものがあるような気がした。要するに、あのような場で聴くと、意味は分からなくともありがたい気分になるのである。

朝食後は、私にとってのメインイベント、坐禅体験である。私は子供の頃から粗忽者で、父親にお前のような者は坐禅でもすればよいといわれていたのだが、この年齢にして初めての体験となった。坐禅の場は、100 年前に資産家が建てた邸宅で、東京の赤坂にあったものを、1928 年（昭和 3 年）に比叡山が買い取って移築したものだという。今は、延暦寺の迎賓館として使われていて、昭和天皇・皇后も休憩されたという由緒ある建物である。まずは、お坊さんから坐禅について説明を受ける。目は閉じるのではなく、うつろな目を少し前の畳面に落とす。呼吸は腹式でゆっくり、息をすっかり吐けば自然に入ってくる。呼吸に合わせて数を数える、途中で数がわからなくなったらまた 1 から数える。そうすることで、何物にも動じない境地に入ることができる。無理に結跏趺坐をしなくて良い。ということで、30 分間。私は、結跏趺坐には自信があったのだが、半分ほど過ぎたら急に苦しくなってきた。苦しい、と思った瞬間にカウントが中断する。最初は 50 くらいまで数えたが、その後は何回やっても 10 まで行かないうちに幾つ数えたか分からなくなるのには驚いた。終わった後に、「数を数えるのがこんなに難しいとは思わなかった」と言った人がいたけれど、全く同感。修行を積んだお坊さんも数えるのだという。寝ながら呼吸を数えるのも良い、ということなので、最近は朝目が覚めたら呼吸に合わせて数えるようにしているが、なかなか 10 まで到達できない。修行が足りないことを自覚させられた座禅体験であった。　　（鍛治哲郎　記）

「千日回峰行の道・無動寺坂を登る」

「色即是空　空即是色」。凛とした早朝の空気に身が引き締まる。根本中堂総本堂でのお朝事、真言と般若心経が堂内に響き渡る。心を洗い、回峰行の道、無動寺坂へ。

延暦寺会館を出て、ケーブルカーで延暦寺駅から坂本駅まで向かう。駅から車道を歩き、日吉大社末社東照宮に参拝する。しばらくして無動寺道に入る。キランソウが濃紫色の花を咲かせて迎えてくれる。木々の若葉が春の陽光を集めるかのように葉を広げ、葉越しに漏れる陽の光は柔らかい。道の周囲は、ヒノキやスギの木が多く生育している。スギの大木の根元に包まれるように地蔵様が祀られている。歩いている道は、千日回峰行の道である。

上原行照大行満大阿闍梨は、赤山禅院までの「赤山苦行」と京都市内を巡拝する「大廻り」は人のための利他行、山は自利行であると述べられている。最澄の孫弟子・相応(そうおう)の始めた回峰行、最澄が「最も澄む」己を目指し、「自分を忘れて、他のために尽くす」という「忘己利他(ぼうこりた)」の精神で貫かれている。日本仏教の聖地である比叡山、「世の中に山てふ山は多かれど　山とは比叡の御山をぞいふ」と言った慈鎮和尚のお言葉が身に感じ入る。

幾分道は緩やかになる。サイコクミツバツツジが、紅紫色の花を枝一杯に咲かせている。春を象徴する鮮やかさ。紀貫之のお墓にお参りする。仏前に供える香気があるシキミがたくさん生えている。『土佐日記』の作者・紀貫之は、もたて山(裳立山)から見える琵琶湖の風景を愛し、この地に墓を建てさせたとのこと。

道標まで戻り、無動寺谷まで下りになる。谷に降り切ると、ヤマモミジが初々しい若葉を展開し、とても美しい。小沢を渡り再び登りになる。玉照院の前に出た。親鸞聖人が修行されたとされる無動寺大乗院からきつい階段を登れば、千日回峰行で最も厳しい修行である「堂入り」が行なわれる無動寺明王堂に到着。堂内から行者の真言が聞こえてくる。今日は春霞に煙っているが、琵琶湖の眺めはすばらしい。

明王堂から延暦寺ケーブル駅を過ぎ、延暦寺会館まで舗装道を戻る。歩行距離約 8.3km。

先達を務められた京都・滋賀支部の皆様に感謝申し上げます。

(参考)『週刊仏教新発見』朝日新聞出版。〈富山支部・渋谷茂〉

日本山岳会「会報」NO.852 より転載。　　（渋谷茂　記）

アルパインスキークラブ　立山合宿

期日：平成 28 年 4 月 27 日（水）～28 日（木）

参加者：山田、近藤、若尾

27 日立山駅 7 時 20 分発のケーブルで山田氏と一緒に室堂へ上がる。バスは雪の大谷見物の外国人（ほとんど中国、台湾）で騒がしい。美女平駅周辺に雪は全く見当たらない。下ノ小平あたりからやっと谷間に残雪が見えだしたが本当に今年は雪が少ない。お天気もよく薬師岳、鍬崎山、大日岳などが一望できる。8 時 30 分室堂へ到着、ここで安井氏に電話で連絡、彼らは一ノ越から御山谷を滑るとのことなので我々も一ノ越で合流しましょうとシールを貼り一ノ越を目指した。

三々五々、他のスキーヤーたちと相前後しながら一ノ越へ向かう。私のリュックは僅かに 5kg 程度と軽いのだが意外に息が上がって登りに難儀する。最後は 100 歩歩いては一息いれながら這うようにして 1 時間 30 分もかかって一ノ越の小屋へ到着した。雷鳥沢から登ってきた安井、武井、松沢氏らも同時に到着した。

槍穂高や水晶、黒部五郎、笠ヶ岳など北アルプスの山々が目に飛び込んでくる。若尾さんたち先に登った連中はもう御山谷へ滑り込んで下の大岩で食事をすると携帯電話で連絡があった。私は空身で途中の岩までひと滑り、実に快適だった。

山田さんは下の岩まで滑り降りて行った。戻り返しにまた息を切らせながら小屋へ戻った。間もなく下へ行った連中も戻ってきた。

1 時頃みんなで一ノ越から浄土沢を雷鳥沢目掛けて滑り込む。今回のメンバーは 70 歳代の高齢者が多いのだが、体力もスキー技術も実に大したものと感心させられる。気持よくスキーを走らせ 2 時すぎに雷鳥沢ヒュッテに到着し、ヒュッテ前のテーブルでワインタイムを愉しむ。

さっきまで晴れていた立山、真砂岳など稜線が急に雲に包まれてきた。予報通り明日は雨か！今日は昼食も取らずにワインを飲んだら酔いがまわり部屋でひと寝入り、5 時すぎに目を覚まし温泉に入る。湯が熱く水埋めに時間がかかる。

夕食は割合お粗末だった。お客も我々以外は４～５名だけ、地獄谷のガス噴出以来ここまで来る客は段々少なくなってロッジ立山連峰もまだ閉鎖中、これからの山小屋経営も大変だろう。主人の寿一郎氏に挨拶，親父さんも元気で間もなく山へ上がってくると言っていた。

28 日は予報通り朝から雨だった。ウイーゼルが 7 時 30 分に出発するので我々も 8 時に小屋を出発し室堂へ向かった。私はスキーとシールをウイーゼルに載せツボ足で歩き出したが今日も登りは辛い。1 時間 20 分で室堂へ到着、ここで解散式を行い帰路に着いた。26～27 日と良いお天気に恵まれみな充分満足していかれたようだった。来年はもう少し時期を早めようと安井さんが言っていた。私は果たして来年も来れるかな？　　（近藤晋　記）

5 月例会山行・城ヶ平山(茗荷谷山)446m

期日：平成 28 年 5 月 22 日（日）　午前 8 時 45 分～午後 1 時 40 分

メンバー：山田、木戸、永山、渋谷、鍛冶、山岸、菅田、森田、本郷

今回、富山支部 5 月の例会山行・一般募集山行として、昨年の元取山に引き続き『富山の百山』城ヶ平山を選び、北日本新聞社の後援のもと実施した。

連日の晴天に続き当日も天気に恵まれた。

集合場所の大岩親水公園駐車場で山田支部長の挨拶、スタッフ紹介の後、森田会員が先行ガイドを務め、大岩登山口を出発。5 月はじめの連休中の強風で、何ヶ所か倒木があった。山頂には午前 10 時 40 分に到着。頂上は 360 度眺望がきく。三等三角点の広い山頂である。剱岳、毛勝三山、近くにはハゲ山、鍋冠山を見て、一時を過ごす。

下りは、大変よく整備された正男新道より浅生登山口へ。午後 0 時に到着。アニメ映画「おおかみこどもの雨と雪」のモデルとなった古民家「花の家」で、家主の山崎さんよりコーヒーや味噌汁などの接待を受け、参加者一同感謝する。今回の企画のために、地元有志の皆さんが、事前に登山道を整備していただいたとのこと。重ねての感謝である。山崎さんを囲み、記念撮影の後、大岩登山口に向けてひたすら車道を歩く。登山口で木戸顧問の挨拶で解散となった。

初登山の方から経験豊富な方まで、一般参加者は 26 名、年齢は 45 才から 75 才までの平均 61 才であった。半日余りの行程で、参加者から「充分満足できた」との声をいただいた。（本郷潤一　記）

追悼

袴腰山を愛した西川雄策氏

佐伯郁夫

2015.4.17 撮影
「富山電気ビルにて」

私が西川雄策氏にお会いしたのは三度だけである。だが、最初の出会いは、あまりにも強く印象に残るシーンであった。

1970 年 4 月、天気の良い日であった。私の店に橋本廣（当時 JAC 会員）、高塚武由、私の妻（当時 JAC 会員）と 4 名が顔を揃えた。どこかへ行こうという話になり、袴腰山ということになった。当時は情報がすぐに手に入る時代ではないので、城端の町はずれで自転車店を営む加藤伸二君に状況を聞くために立ち寄った。彼が西川雄策氏に連絡をとったところ、ただちに駆けつけてくれた。後を付いてくるようにと車で先導してくれる。五箇山方面へは通行止めの看板があったが、そのまま車を乗り入れる。道はブルドーザーできれいに除雪されていた。細尾峠から下ってしばらくしたところで、この谷を登れば袴腰山に着くと言って彼らは引き返していく。

袴腰登山は快適だった。私達は池の平をめぐり小瀬峠を経て車に戻った。細尾峠を過ぎて人喰谷に廻り込んだところで直径 1mくらいの雪のブロックが数個落ちていた。私と高塚は雪の塊をよかそうと車を降りて歩いて行った。ザーッと音がしたので振りむくと大斜面の雪が全部動いている。一目散にそのまま城端側へ走った。踵のすぐ後に大量の雪が迫ってくる。妻と橋本廣氏は車ごと人喰谷に埋まったと思った。しばらくして 2 人が膨大なデブリの上を歩いてきた時はホッとした。橋本氏が車を後退させていたのである。1 秒遅かったら、互いに生きてはいなかっただろう。道路から稜線まで標高差 100m以上あり、積雪量も 2mを越えていた。その雪が全部落ちたのである。山肌に雪は全くなくなっていた。

しばらくして、下から登ってきた車があり、デブリを見て引き返していくので、私たちが立ち往生していることを加藤自転車店に伝えてくれるよう頼んだ。待つこと 2 時間。西川氏の会社のマイクロバス

に西川氏と加藤君がスコップを10丁ほど積んで駆けつけてきた。人力ではなんともならない状況なので、デブリの細尾峠側に車を残し、マイクロバスで城端駅へ送ってもらった。西川氏との最初の出会いはあまりにも劇的なものであった。

西川氏は後輩の面倒見も良かったようである。1970年代は、五箇山の合掌造りが各地へ持ち出された時期で、富山市内や県外へも運ばれていた（今は世界遺産で持ち出せない）。茅葺屋根の古民家はノスタルジーを満たしてくれるのだろう。加藤伸二君も1975年自転車店を廃業して、皆葎（かいむぐら）にあった合掌造りを桜が池の池畔に移して“かずら”という手打ちそばの店をひらいた。この店を開くにも西川氏は尽力したという。私が登山ガイドブックの取材で五箇山方面へ出かけた際、立ち寄ったら加藤君が西川氏を呼んでくれ、彼の店で再会したのが二度目である。

次に会ったのは『富山県山名録』（桂書房刊）の出版記念会、2001年6月17日である。この集まりは執筆者100名のほとんどが集まり大変な賑わいであった。私は自分用の「富山県山名録」に、この日の出席者からサインをいただいたが、“西川雄策”のサインもきちんと残っている。今見直して感無量である。西川氏は袴腰山のみを執筆している。

なお、富山県山岳連盟の『富山の百山』（2014年8月発行）にも袴腰山を担当しておられる。この山だけは思い入れが強く、人に任せることはできなかったのだろう。

袴腰山の山頂展望台は材料のすべてを西川氏が提供し、城端山岳会の会員全員で運び上げ組み立てたという。西川氏は初代会長の吉崎章氏（元富山県山岳連盟副会長）と従兄弟であり、袴腰山は彼らが最も愛した山のようである。

西川氏は2015年9月には奥様と共にマチュピチュの遺跡を訪ねておられる。インカ道と呼ばれる長い石段の道を高度障害もなく登られたのだが、そのわずか1ヶ月半後の10月28日に急にお亡くなりになった。なお、私の親しかった吉崎章氏、加藤伸二氏もすでに鬼籍の人である。冥福を祈るのみである。

※ 当時は国道156、304号共に積雪期通行止めであり、平村、上平村の人達は庄川の船便で里へ出ていた。そのため冬の五箇山地方は陸の孤島と呼ばれていた。

※ 『北越の山歩き』（桂新書）で橋本廣氏は「人喰谷の雪崩」について書いている。なお、人喰谷はその名の通り積雪期は危険な道であった。今の国道304号は細尾峠も人喰谷も通っていないので、だんだん忘れられていくことだろう。

※ “かずら”は40年を経て屋根も傷んだので、今後は南砺市が修繕して利用することになっている。

西川雄策氏を偲ぶ

中藪　淳一

私と西川君とは、砺波中学からの同級生であり盟友である。

「我々が常盤の森の鷹栖の砺波中学へ入学したのは、終戦間近い昭和20年4月であった。わずか4か月であったが、戦時下の旧制中学校生活を送ったわけである。そして終戦。新生日本の教育が始まったと言うものの戦後社会の混乱と窮乏は甚だしく、我々の中学校生活は先にも後にもない未曽有の経験を強いられたと言っても過言ではない。しかし、あの激動の中に、戦後のめざましい発展の原点があったことも事実である」

これは、中学時代の冊子『碧流』の巻頭言、西川君の言葉である。その頃、彼の家は繊維織物業を運営し、彼の父栄一氏は城端町長を務めていた。当時地域の繊維業界は絹織物をルーツとした産業から時代の変化やニーズにあわせ合成繊維織物への転換を図るためレーヨン織物の開発をすすめていた。しかし、経営難に直面し苦境の時期でもあった。

「お前がやらんがなら会社を畳む！」と父に言われ、早稲田大学を中退、家業に専念することとした。21 歳で西川産業を継いだことになる。

彼は、友達に口説いたり愚痴を言ったりはしない。「昔と比べればたいしたことはない」と、2008 年 7 月に起きた集中豪雨時、自宅や工場が水浸しになった時もその苦難を乗り越えてきた。

西川君は自然や歴史文化に造詣が深く、多くの足跡を残してくれた。当時富山県山岳連盟の副理事長であった吉崎　章氏の助言もあって城端山岳会は活発であった。その頃、県境「笈ヶ岳（おいずるがたけ)」に立派な道標を建立した。また、縄が池周辺の自然保護や「越の彼岸桜」の保全愛護にも尽力し、その中心となって働いた。県下でナチュラリスト研究会を持った活動をしている唯一の団体は、城端山岳会のみであろう。

彼は、平成 8 年同級会井波会場で『碧流』の編集のあいさつの折、脳梗塞となり入院。回復は早かった。回復後は正子夫人と共に軽い旅を実施。毎年の年賀状の言葉を楽しみにしていた。

西川君、どうぞ安らかにお眠り下さい。君の魂や想いはあなたの功績とともに、永久にご遺族や同級生・友人の胸に生き、家族の繁栄や郷土の進展をお守りいただくものと深く信じている。

河村靖晴君追想

長崎 喜一

2014.3.9 撮影

「舟見城跡付近にて」

正月気分も抜けきらぬ暖冬の 1 月 17 日、河村君の突然の訃報にビックリ仰天。暮れにいつもの彼が夢創塾に来て雑談の折には、何の気配も感じなかっただけに、信じがたく心が乱れ戸惑いました。

彼は 40 年前、入善ＮＥＣ工場新設に伴って東京から入善町に移住。義弟関係にあって自然好きな彼とは、以来スキーや山登りを重ねる内、登山家と呼ばれるまで山登りに熱中、信頼できるパートナーとして近年まで山行を共にしていた。

1993 年、自然保護活動を目的として、米国マザマス山岳会と富山県山岳連盟が日米親善友好交流締結を契機に、米国カスケード山脈に座する聖なる山 16 峰、日本百名山踏破を目指し登山交流が始まる。当初岳連メンバー数名がセントヘレン山に登頂、翌年フッド山登頂、以降レニア山から河村君が加わり、マザマス山岳会ダグ氏ガイドのもと毎年 1 座に挑戦し続ける。2009 年には最後の 16 座目、グレシアーピーク山に登頂して終了。人生最高の感動と満面の笑顔でしたね。後日、マザマス山岳会から 16 座踏破の岳人に送られる「SIXTEEN MAJOR NORTHWEST PEAKS AWARD NO.458」を受賞。最高の栄誉をいただいたと共に喜び、賞を肴にして祝杯をあげていたのが懐かしいです。

一方、マザマス山岳会のダグ氏が日本百名山に挑戦、すでに百名山の大半を踏破していた河村君がチーフリーダーとなって、私とも分担しながら案内し続けた。彼がガイドすること 20 年、2013 年にダグ氏が北岳に登頂して百名山を踏破終了。ダグ氏等が訪日したときは、アメリカの聖なる山を登頂させてもらったお礼といって、ゲストハウスでそばや天ぷらを振る舞ってのもてなしに、岳人の神髄を見たものです。お互い聖なる山、百名山の踏破を終え、これからは日米両国でブラブラトレッキングで楽しもうと誓ったばかりなのに、天界に旅立ちさみしい限りです。河村君の分も長生きしてご冥福をお祈りします。 合掌

河村さんの思い出(夢源工房の事など)

藤條好夫

河村さんがゲストハウスを兼ねた木工処・夢源工房を構えたと聞いたとき私は大変喜んだ。なぜなら当時私は趣味のパイプ作りの作業場所に困っていたからである。パイプ用の原木は非常に硬くナイフでは１ミリも削れない。木工用やすりで気長に削り出していくしかなく自宅での作業は削り粉が散乱し家内に散々嫌味を言われていたのである。電話したら快く使わせてもらえる事になった。工房に足を踏み入れてビックリした。各種の木工細工の機器が取り揃えられていた。それは素人が趣味で使う範囲を超えた空間である。全く知らなかった河村さんの一面を見た思いであった。

早速河村名人指導のもと道具を借りて効率よくパイプ作りに使わせてもらう事になった。以後頻繁に通い何本もの名品?のパイプがこの工房から誕生する事になった。でも、大抵作業時間はわずかで、すぐに「お茶でも飲みますか」の合図で居間に移り、取りとめのない話で時間を過ごした。ある時大事そうに引き出しから取り出したのは 2005 年ネパール・ギャジカン峰登山の時手に入れた冬虫夏草の珍品であった。普段寡黙であったが、この時ばかりは不老長寿の妙薬について河村さんの喋りが盛り上がったのを覚えている。沢山の品々を作ってもらった。飾りケース台・猫小屋・釣り用アワビルアーの削り出し・直径５ミリにも満たないビーズ玉の穴あけなど、大人の工作遊び場所と言う雰囲気であった。そしてゲストハウス南側テラスから見渡す僧ヶ岳・白馬岳・朝日岳そして大鷲山へとつながる峰々の移り行く四季は、山に惹かれる者にとって癒しの場所であった。

一度河村さんの作った長い脚の付いたテーブル風の囲碁台を拝見したことがある。遊び心溢れる作品だった。楽しい自分の時間を過ごしておられる様子だった。しかし、河村さんは正確緻密であった。私の目測作業とは違い、いつもノギスを当ててしっかり墨線をいれてから作業を開始されていた。しかし最近目が都合悪く夜間の外出も控え、山岳会の例会も欠席状態だとつぶやいておられた。

私の書斎の机の上にパイプレスト台が置かれている。きちんと面取りしラッカー塗装が施された逸品である。河村さんが私の為に作りプレゼントしてくれたものである。雑な自作パイプと不釣り合いで弱っている。いずれまたこのレスト台に似合う会心の一本を作り供え置きたいものである。

平成 28 年度　富山支部総会の報告

期　日：平成 28 年 4 月 15 日（金）
参加者：山田支部長以下 25 名
ところ：富山電気ビルディング

平成28年度の富山支部総会が開催されました。議事については、以下の通りで報告と計画が審議され、全て了承されました。

・第 1 号議案　H27 年度事業報告
・第 2 号議案　H27 年度収支決算報告（監査報告）
・第 3 号議案　H28 年度事業計画（案）
・第 4 号議案　H28 年度予算（案）
・第 5 号議案　創立 70 周年記念事業について
・第 6 号議案　役員改選

〇創立 70 周年記念事業につきましては、実行委員会を立上げることになり、松本睦男会員が委員長となり事業推進に向け打合せを重ねてまいります。

総会終了後、全員の記念写真を撮り懇親会に入りました。昨年より出席者が増え、それなりに若い顔ぶれも目立ってきました。公益社団法人の活動が活性化してきそうな気がします。　（有澤辰彦　記）

会員異動

〇新入会員　　米谷真由美（よねたに　まゆみ）　会員番号 15995　4 月入会
〇退会　　櫻井奈緒子　会員番号 15570　3 月退会
〇物故　　河村靖晴　会員番号 13276　2016 年 1 月 17 日逝去　72 歳

編　集　後　記

春から夏への季節の移り変わりを充分確認できないままに、夏の訪れがやってきたようなこの頃です。川田前編集委員長の後を受けて、大役を受けることになりました。自らの思いを文にしたためることは、なかなか大変なことです。会員の皆さんには、快く投稿していただき感謝の言葉もありません。会報が完成するたびに、富山支部の歴史を、また積み上げたような充実感を覚えます。今後も皆さんのご協力で、会報作りに励みたいと思います。　(編集委員長　渋谷茂　記)

第 102 号は予定を越えて 16 ページでお届けします。残念なのは予算の関係で貴重な記録写真を白黒で届けざるを得ないことです。別途、メールマガジン「日本山岳会だより」に支部会報を掲載しております。気になる写真等は日本山岳会のホームページから確認してください。（編集委員　北田幹夫　記）

公益社団法人日本山岳会　富山支部会報　第 102 号
発行者：山田信明　　編集者：渋谷茂・北田幹夫
事務局　〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204　河合義則方
電話　076-492-3936　　090-4326-6197　　E メール　kawa-mori55@air.ocn.ne.jp